保育内容の領域「人間関係」に関する一考察Ⅱ

―保育現場における人間関係の考え方について―

金　子　亜　弥

A Study on the contents of childcare “Human relations” Ⅱ

— Approach to human relationships in childcare settings —

KANEKO Aya

キーワード：人間関係、短期大学学生調査、
保育環境、保育者養成

１．はじめに

本考察は、近年のコロナ禍での生活において、前稿に続いて、子どもや保育者を目指す学生の人間関係を捉える考え方の一考察である。今回は、「人間関係」をキーワードとして、今後の授業に応用可能な内容や方法を考案することも目的としている。

「令和４年度後期の大学等における授業の実施方針に関する調査」[1)]（各大学等の回答状況）では、全面対面授業とする予定とした大学等は 64.1%（前期は 55.5%）であるが、７割以上では 98.5%、半分以上では 99.8% になる。学修者の教育活動の実施と学びの機会を失うことのないきめ細かな対応については、十分な取組の場にいる。次年度を見据えて担当科目の内容や方法に関した授業研究を展開する場合、単にコロナ禍における有効な取組とはまた別の変化が求められるような気がしてならない。

担当する「保育内容（人間関係）指導法」は、１年生後期の科目である。他でも演習や実践を伴う科目の場合、実践力をはかることが難しいという問題に直面してきた。学生はこれまでの学修やボランティア経験、実習科目の履修有無などの選択もあり、同じ条件下で学びはじめているとは限らない。加えて２年生は、遠隔授業や実習の学内演習を経験している学年であり、全て対面授業となった今年度への戸惑いがなかったのかどうかも気になるところではある。そこで学生生活の状況をみていきながら、保育内容の人間関係について考察する。

２．学生の状況について

２－１　「短期大学学生に関する調査研究」より

「短期大学学生に関する調査研究」の「短期大学生調査「教育系　幼児・保育」分野集計結果」[2)] の中から、人間関係やコミュニケーションに関連すると思われる次の３つの回答について 2017 年～ 2021 年（５年分）の推移をまとめた。

・今の短大に入学して、次のような活動に参加したり体験したりしましたか。
・今の短大に入学して、あなたの能力や知識はどの程度変化（向上）しましたか。
・あなたの通っている短大についての総合評価をお聞きします。次のようなことについてあなたの評価として一番近いものをそれぞれ１つだけ選んでください。

〔他の学生〕

2019 年の 12 月頃よりコロナ感染症の話題がではじめたため、2020 年以前と以後に着目すると、コロナ禍の影響があると思われることを含めながら、学生が置かれている状況をまとめた。

２－２　実体験の減少

「今の短大に入学して、次のような活動に参加したり体験したりしましたか。」という質問項目には、「サークルや部活、その他の学生団体」「学校行事の委員や運営スタッフ」「インターンシップ」「地域貢献・ボランティア活動への参加」「海外留学・海外旅行」の５つの体験項目にまとめて、「した」「しなかった」の二択のうち「した」の回答が図１である。

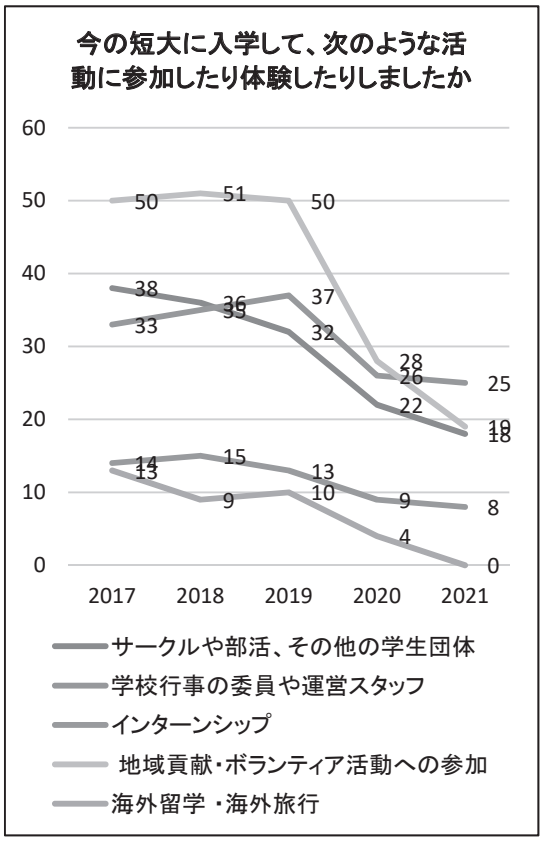

図１（海外留学と海外旅行項目はまとめて表記）

2020年より約半分ほど減少したのが「地域貢献・ボランティア活動への参加」である。他は緩やかな減少傾向、もしくはほぼ同様の傾向にある。コロナ禍の規制が見直され、感染予防の対策を講じながら学校行事が実施されており、2022年度の結果は上昇してきたのではないかと推察する。保育者養成のうえで、子どもに限らず、実際に人と接する体験は欠かせないと考える。本学でも、実習に行く前にボランティア体験の推奨や半日見学実習をおこなっている。ボランティア体験の有用性は、現場になれることが第一の目的でもあり、保育活動の流れや職務理解、記録の仕方などが主となることが多い。子どもや保育者との関係を築いていく実体験の機会が、得られ難い社会情勢であったことは否めない。サークルや学校行事の委員等での活動との違いは、出会う人の年齢の幅にあり、世代の異なる人との対応だと考えている。コミュニケーションを育む力は、体験的な学びの不足とも関係があるかもしれない。

２－３　保育者の資質・能力

「今の短大に入学して、あなたの能力や知識はどの程度変化（向上）しましたか。」という質問項目は、「一般的な教養」他22項目あり、五択のうち「大きく増えた」と「増えた」を合わせた回答の５年分が図２である。

22の質問項目のうち、「人間関係」や「コミュニケーション」に関連するとした４項目は、「異なる文化や考えを持つ人々を理解する力」５位、「他の人と協力する力」２位、「コミュニケーション能力」６位、「自己の理解」11位であった。１位は「専門分野や学科の知識」、下位の20位は「プレゼンテーションをする力」（同位の他項目あり）、21位は「外国語を使う力」であった。

４項目の数値だけをみていくと、特に「異なる文化や考えを持つ人々を理解する力」は、2017年が59％に対して、2021年は73％となっており、他の３項目は緩やかに上昇している。しかし22項目全体でみていくと、「異なる文化や考えを持つ人々を理解する力」は、７位→12位→５位→５位→４位であるのに対して、「他の人と協力する力」と「自己の理解」は毎年２位と11、12位で同じ、「コミュニケーション能力」は５位→５位→６位→８位→８位」と下降している。これは、他項目の一律の上昇率によるものだとも考えられる。

能力や知識というのは、学修内容だけをさすものではなく、人間関係やコミュニケーションという事項も含む意味を考えると、学修同様に必要事項である。コロナ禍の影があるとしても、下降し

続けている数値とは言い難く、実質的な対面でのコミュニケーションでなくとも、オンライン上での繋がりを積極的に利用しているという結果かもしれない。

２－４　他学生との交流

「あなたの通っている短大についての総合評価をお聞きします。次のようなことに ついてあなたの評価として一番近いものをそれぞれ１つだけ選んでください。〔他の学生〕」という質問項目は、「親しみやすい、一体感を感じる、一緒にいたい」と「やや親しみやすい、少し一体感を感じる、少し一緒にいたい」「どちらでもない」「やや親しみにくい、少し疎外感を感じる、あまり一緒にいたくない」「親しみにくい、疎外感を感じる、一緒にいたくない」の五択回答の５年分が図３である。

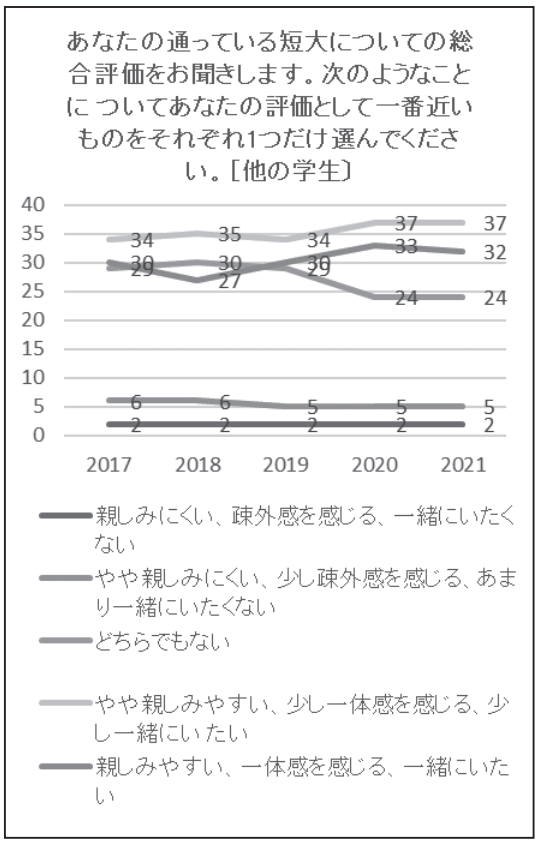

図３

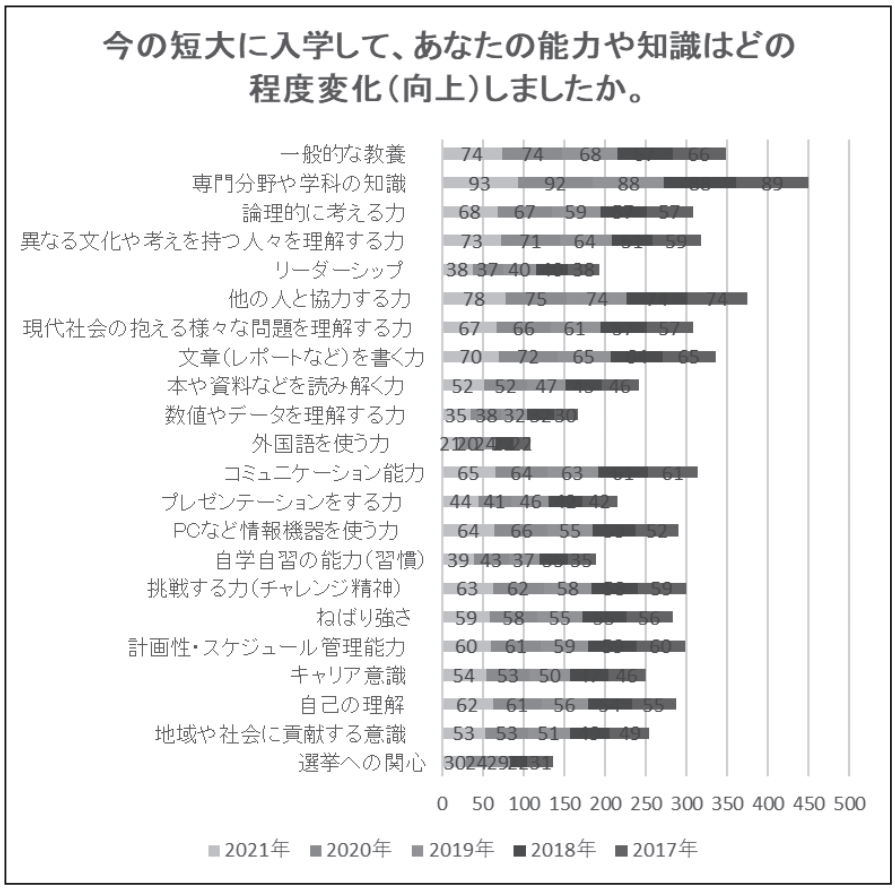

図２

「やや親しみにくい」等の否定的な回答は、毎年ほぼ同じであるのに対して、「親しみやすい」とする肯定的な回答が増えて、「どちらでもない」が減った。

コロナ禍の自粛期間が緩和されはじめ、対面授業が再開した時には、久しぶりに学校で会う友達と喜び、話が弾んでいるような光景が見られていた。友達と会えない期間があっても、前述の通り、繋がりが途絶えてしまうことには結びつかないと考えた。友達への親しみが増したという傾向がある一方で、疎外感や一緒にいたくないと思う学生がいることも考慮しなければならない。短期大学が小規模であるほど、構内やクラス内で密接な時間を過ごすことになり、心理的な負担や不安を抱える状態であるかもしれない。

短期大学の２年間は、毎年の調査で半数が昨年も回答した学生が存在していることや、全体数の比率による数値が変わりやすいが、近年の学生の傾向として把握しておきたい。

３．実習からの学び

担当科目の授業を通して、学生が実習からの学びや DVD 視聴から、幼児の姿をどれほど捉えられるのかについて述べる。

はじめての実習である 11 月の教育実習（幼稚園）を終えた 12 月にアンケートを実施した。

授業名：「保育内容（人間関係）指導法」
（１年生後期必修科目）
対象学生：Ｓ短期大学１年生 81 名
（有効回答 64 名）
アンケート内容

幼稚園教育要領[3]の人間関係の内容（１）～（13）までのうち、教育実習（幼稚園）時に見学や観察実習も含めて具体的な活動を通して総合的に指導されていた、あるいは指導されていることを感じた項目の番号に〇印を付けてもらい、無記名で回収した結果をまとめた。（図４）

「自分でできることは自分でする。」60 名（97％）と一番多く、次いで「共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。」59 名（92％）となり、一番少ないのは「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。」８名（１％）であり、この結果を４つ（A ～ D）のグループに分類した。

A　80%以上回答

（２）自分で考え，自分で行動する。
（３）自分でできることは自分でする。
（９）よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
（12）共同の遊具や用具を大切にし，みんなで使う。

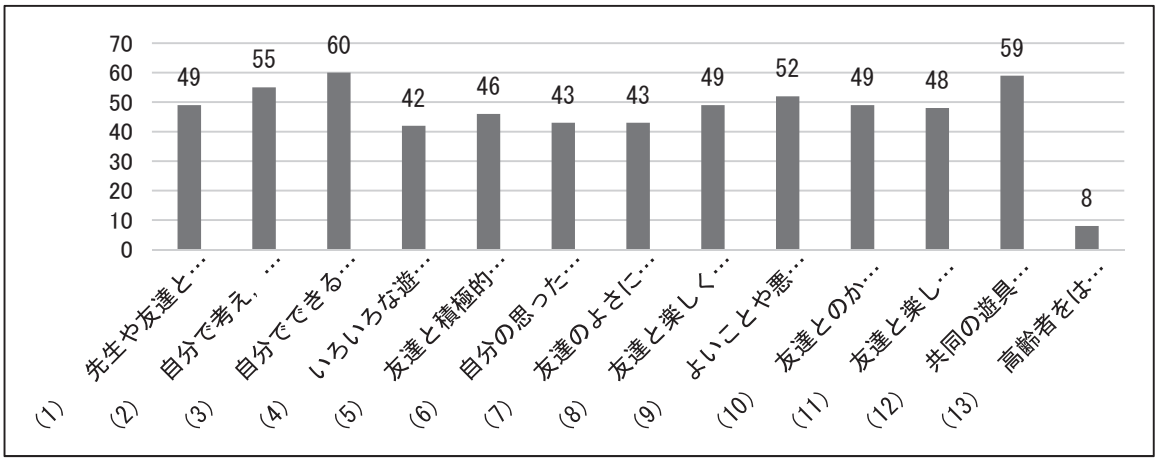

図４　実習を通して保育内容「人間関係」にある指導内容がなされていたこと
（n ＝ 64　　複数選択の回答あり）

B　70%～79%回答

（1）先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
（5）友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。
（8）友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。
(10) 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。
(11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。

C　60%～69%回答

（4）いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
（6）自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
（7）友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。

D　60%未満回答

(13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

各グループの主な特徴を示す。

A：子ども自身の姿や様子
B：先生や友達と一緒に過ごすことの育ち
C：相手や友達とかかわるうえでの内面的な働き
D：園外の方々とのかかわりをもつ

高齢者や地域の人々とのかかわりは、園行事や園外での保育活動としていることが多いのではないだろうか。Cの平均が42.6人に対してDは8人と差がひらいている。2週間という実習期間の中で体験できることは限られているが、今後授業を進めるうえで、多く事例を扱うなどしていきたい。

浅見[4]によると、学生は実習で子ども理解と保育方法に関する学びをし、保育者と子どもとの関わり方には、促しや見守り、指導等に分けられたという。実習日誌を書くことを考えると、目前の活動や姿の記録が必要であるが、その活動や姿の意味を考えることで、保育者としての配慮や子どもの心情を深く読み取ることができるのではないだろうか。

一方、2年生は10月に、担当する他科目の授業で、認定こども園や保育園での子どもの様子を映したDVDを視聴しながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がみられる場面の書き取りをおこなった。しばしば画面を静止画像にして解説を加えたが、学生にとっては、とても難しそうにみられた。動画をみながら書き取ることの難しさよりも、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿の具体例が、どの場面のことなのかがわからない、ということであった。子どもの姿は、事例集や解説本の記載内容だけがすべてではもちろんない。成木[5]は、保育者養成校では体験重視の授業計画や学外活動などの工夫、保育現場では経験年数に限らずお互いを助け合うシステムが必要であるという。日ごろから保育者同士も良好でいられる職場の雰囲気が、そのまま園内の人間関係を生むようだ。

4．人間関係と環境

前述した浅見[6]は、人間関係のあり方は環境に通じるという。保育園の場合、保護者の就労都合で12時間過ごすこともある園環境について考えていきたい。

埼玉県内のT保育園は、社会福祉法人A会5園のうちの1つで「環境を通じての保育・教育」を実践している。

「こどもたち自らが主体的に挑戦できる環境や活動を整え、こどもたちの発達を見守り、促す丁寧な保育」を掲げている。保育所保育指針に基づき根拠ある保育を進めるとし、「人間関係」と「環境」について次のように説明している。

〔人間関係〕さまざまな人たちと親しみ支えあい、くらすために、自立した心を育み、人と関わる力を養う。

〔環境〕環境は、こどもたちの好奇心や探求心をくすぐる。こどもたち自身が主体的に関わることで、多くのことを学ぶ。

人間関係では、異年齢児保育により、思いやりや感謝の気持ちなど、人と関わることで育つ心や感情と、関わる力を育むとしている。環境では、生活や野外活動により、健やかな心身を育むとし

ている。

「こどもの成長を育む環境　育ちのポイント」（表1）には、育ちのキーワードとして、「自分」「他者」「言葉」「グループ」「ルール」との「出会い」としている。

表1

こどもの成長を育む環境　保育のポイント（一部抜粋）

年齢	育ちのキーワード	発達の様子
0歳	自分との出会い	おとなからの働きかけに応える時期
1歳		環境を探索する時期
2歳	他者との出会い	自我が拡大し自分の遊びが生まれる時期
3歳	言葉との出会い	対象に合わせた調整機能が高まる時期
4歳	グループとの出会い	
5歳	ルールとの出会い	協同的な学びへと向かう時期

T保育園の特徴的な園環境の仕組みから、人間関係と環境とのつながりについて述べる。

室内の環境設定として、ロフト（図5）とコーナー遊び場（図6、7）がある。

巨大な木製ロフトは、次のような過程を経て、職員が指導を受けながら制作したものである。

・一級建築士の先生より、安全性に配慮し、子どもたちが自然に育つ環境について学ぶ。
・子ども達も環境づくりを一緒におこなう。（同法人の他園の保育者も参加）
・楽しく、安全に使うための意見を出し合い、子ども達が考えて決めたルールを大切にする。

（「ろふとのつかいかた」作成）

図5　ロフト（正面に巨大な木製のロフト、奥の階段から上がり左上にみえているロフト）

図6　コーナー遊び場（3～5歳児保育室）

図7　コーナー遊び場（0～2歳児保育室、奥には畳の部屋がある）

図8　保育机（上段①②、中段③、下段④）

机は長方形以外（図８－①②）もあり、組み合わせによって形をかえ（図８－③）、座る子ども同士の距離や関係性の変化を秘めていそうである。昼食時も使用するため（図８－④）、日ごとに子ども机を移動して形を変えて楽しんでいるという。

人気があるという木製のロフトでの遊びは、高さもあることから安全に使う遊び方が徹底される。また、中にあるモノを使用すること、各々遊びのイメージがあること、異年齢児との関わりがあること、言葉のやりとりなど、Ｔ保育園の出会う育ちのポイントがある。子ども同士の関わり方は非常に密な空間であると考えられる。

室内階段を上がると、「秘密基地」のようだというもう一つのロフトがあり、室内を回遊できる構造になっている。

戸外では、Ｔ保育園には屋上庭園があり、園庭と階段で繋がっている。室内と戸外共に廻ることのできる「回遊性」のある園舎となっている。（図９、10）

図９　屋上庭園（木の広場）
（左の階段を下りると１Ｆ園庭にでる）

図 10　１Ｆ園庭（土の広場）
（園庭を囲むように１Ｆ保育室がある

コーナー遊び場の特徴は、仕切りがあることである。子どもが仕切りの内側に入ると、外側から見えづらく、隠れているように感じることで、遊びに集中できる仕掛けになる。一か所のコーナーで、ずっと遊びを続けている子どももいるそうである。オープンスペースに設置されていることもあり、異年齢児との関わりはもちろん、興味のある場所に集まる子ども同士の遊びの展開や発展、折り合いなどが見られる場となる。つまりＴ保育園は、回遊と滞留行動の遊び方ができるのである。

中田[7]は、２、３歳児の回遊・滞留行動分析で、場を離れたり戻ったりするときに言葉を交わし、意味づけられた回遊行動をとりながら遊びのストーリーが生成され、保育者のそばを滞留する行動がみられるという。４、５歳児は、滞留したり、回遊したりする行動を体得すると、滞留行動をとりながらも想像の中では、場を移動することができているという。環境を通した人間関係を育む場として、Ａ法人の理事長は、まだまだ試行錯誤を重ねている、と非常に謙虚であるが、様々な条件下のもとで時代にあわせた保育を実践しているといえよう。

５．まとめ

本稿は、保育の領域「人間関係」を考えていくうえでのはじまりに過ぎない。普段の授業を通した机上での教え、視聴覚教材の活用、校外学習や実習での実体験、更に科目の到達課題に応じた授業内容の検討等に直面した。授業だけでは伝えきれない子どもを含む人との関係性に気付くことについて、保育現場の力をかりた様々な試みを実行していく時期なのかもしれない。

同じ保育場面に遭遇しても、保育者と学生（実習生）の感覚的なズレは多少あるだろう。経験だけの感覚に頼らず、学生にわかるように各保育領域を説明し指導する難しさはあるが、保育現場に赴き、感じたことを議論し合うなどの授業の活性化を促せる取組ができるとよい。今後いかなる社

会情勢や状況の変化があったとしても、保育から学ぶ人間関係があることの教えを大切にしたいと考える。

倫理的配慮

本研究における個人情報の扱い、掲載画像等について口頭で説明し、同意および許可を得ている。

謝辞

本研究にご協力いただきました社会福祉法人A会の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

1）文部科学省「大学等における令和４年度後期の授業の実施方針等に関する調査の結果について（周知）」（令和４年11月29日）別紙１「令和４年度後期の大学等における授業の実施方針等に関する調査」
2）一般財団法人 大学・短期大学基準協会「短期大学学生に関する調査研究―2021年調査　全体集計結果報告―、2022年３月（同報告2017～2021年までを一部抜粋）
3）文部科学省「幼稚園教育要領」平成29年告示　第２章ねらい及び内容「人間関係」
4）浅見優哉・田中卓也「保育実習Ⅰおよび教育実習Ⅰを通した人間関係に関する学びについての考察―実習生が見た保育者と子どものかかわりの幼保の比較を通して―」、日本保育学会第75回大会発表論文集、2022年
5）成木智子「保育者に必要とされる人間関係の力とは何か～実践者と学生の意識の違いから考える～」、日本保育学会第75回大会発表論文集、2022年
6）前掲４）
7）中田範子・佐久間路子「幼児にとっての場の意味生成と機能 ―保育室内における滞留行動と回遊行動に着目して―」、研究年報No.27、白梅学園大学、2022年

参考文献

1）梨本竜子・山城いつき「保育者養成課程学生の子どもの人間関係に関する意識の変化について」、日本保育学会第73回大会発表論文集、2020年
2）武山美子・山本華子「保育者養成課程における実習事前体験としての「ボランティア活動」、日本保育学会第73回大会発表論文集、2020年
3）柿沼芳枝・鍜治礼子・中山晴美「「10の姿」を育む保育の省察（２）―領域「人間関係」の視点から―」、日本保育学会第74回大会発表論文集、2021年
4）山路千華・今里淳平「子どもの“遊びこむ”を支える園舎・園庭環境―子どもの遊び空間と保育者の専門性―」、白鷗大学教育学部論集 第15巻第２号、白鷗大学教育学部、2021年
5）寺見陽子『事例と図解で学ぶ保育実践 子どもの心の育ちと人間関係―人を育てるためのかかわりと援助―』、保育出版社、2016年第２版

金子亜弥　（埼玉東萌短期大学専任講師）